

神奈川大学付近での考察に見られた日本の村落共同体

劉 曉春（中山大學中國非物質文化遺產研究中心助教授） LIU Xiaochun

2006年10月、神奈川大学21世紀COEプログラムに招かれ、日本で2週間の調査研究を行った。歓迎会の際、拠点リーダーの福田教授に村落調査研究についてご教示を仰いだところ、村落共同体は日本には存在するが中国には存在しない、という説に言及された。中国に存在しない？私は釈然としなかった。中国南方の客家地域で長期に渡ってフィールドワークをしてきた経験から見れば、客家地域では、村落共同体は基本的に血縁に基づき、一姓または多姓が集中して居住し村落を形成している。このような家族に基づいた血縁共同体は、村落の範囲を越えてもっと広い範囲に及び、さらに国境を超えている。そこで福田先生は、農村の痕跡を見ながら、私が日本の村落共同体を実感できるようにと、時間を割いて大学付近を案内して下さることになった。

10月12日、私は先生と共に大学付近を歩き回り、約2時間の考察を行った。短時間ではあったが、先生のフィールドワークの視点から大いに得るところがあった。

一つめは、調査地の地理的特徴を重視することである。出発前、先生は私に1950年代の大学周辺の写真を見せて下さった。写真からは、当時大学の主要な建物は六角橋の高台に位置し、数軒の民家を除けば、付近はほとんど農地であったことがわかる。少し離れたところに建物が散在しており、農家だと思われる。当時からたいして変化してない地形に沿って、現在では周囲には多くの住宅が密集して建てられている。

我々は東門を出て北へ進み、住宅地に入った。大学のすぐそばに、少し盛り上がった土の山があり、そこに稲荷の祠が立っていることに目を惹かれた。このような大学のすぐそばにあって、現代風の戸建ての住宅に囲まれている祠は、中国人の私にとって非常に珍しい光景であった。先生の話によれば、この祠は六角橋の代々の住民に祭られており、周辺の住宅に住んでいる人々にはあまり関係ないと思われるという。これらの建物を見れば、そこに住んでいる人は他所から引っ越してきたと判断できるからである。

坂を下ってさらに進むと、周りとは明らかに違う構造を持つ一軒の家が目前に現れた。広い庭には多くの樹木が植えてある。先生は、この屋敷の持ち主は古くからのこの住民であろうこと、他所から移ってきて、土地を買って建てた家は、広い庭を持つことが少ないことを付け加えられた。屋敷の向こうに、「神奈川消防団第七分団」と書いてある建物があった。これは六角橋の地域的な消防団で、地域共同体の具体的な表現の一つであろう。

二つめは、細かいところから歴史の情報を掴むことである。曲がりくねった狭い道を歩いていた時、これは川を埋め立ててできたもので、川の流れにそのまま沿っているから、くねくねとしているのだと説明をうけた。一見普通の道で、先生の説明がなければ、私にはこれは川であったと思いつくはずがなかった。道端にあるごく普通の石塊に、先生が足を止められた。石塊は長方形で、その一つの面に「地神塔」とあり、反対側には「構中」とあった。上の二つの字は判然としないが、六角橋にある地域共同体の一つであろうと思われる。また、大学の南側には庚申を祭る祠（写真参照）があり、そこにも「南側講中」と刻んだ石碑があった。これらの石碑からも、先生のおっしゃる日本における農村社会の村落共同体の概念が窺えよう。

この考察は国立歴史民俗博物館で見た展示を思い出させた。第4展示室の「村里の民」の展示は、秋田県湯沢市岩崎の藁人形、村の常夜灯、西日本の集落の模型などで、日本の農村社会における地縁共同体の重要性を表現している。藁人形は毎年作り替えて村の入り口に置き、村の安全を祈願する。それぞれの村に、光や音などを使った独自の信号で、火事や盗難などの情報を村社会の中に伝えるシステムがあり、村の安全を保障する。こういった風習から、日本の農村社会における地縁共同体の結束の強さが窺える。このような村落共同体の概念は、確かに、中国 少なくとも南部中国 の農村社会の地域共同体とは大きく異なっている。というのは、中国の農村社会の地域共同体の多くは血縁の上に成り立ち、血縁を基礎として一姓村または多姓村を形成し、血縁を越えた地域共同体は比較的少ないからである。

（劉曉春氏は2006年10月2日～10月15日まで訪問研究員として来日された。）



* 本稿は中国語で提出されたものを彭偉文（RA）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。